



障害をもつ幼児の保育(2)

—この子と出会ったとき—

津守 真

津守 房江

歩くということ その二

どこまでも走っていく男の子に出会ったときのシヨック

前回は、子どもが出て来た場所に戻って、自分の居場所を確認するということを話し合いました。今回は、際限がなく外へ外へと向かって歩いて行く子どものことを考えてみたいと思います。

三歳のY君がはじめて面接に来たとき、部屋の中には子どもが興味をもちそうなものがいっぱいあるのに、それらは目に入らず、部屋の奥の重い扉に向かって体当たりして、悲壮な顔をして向こう側に行こうとしました。そこは地下室や職員室に通じるドアで普段カギをかけてありました。向こう側の空間はどうなっているのか、扉の向こう側に対する強い好奇心と阻止された表情がとても印象深く心に残りました。そのような資質の子どもに私たちが慣れていなかったからでしょう。それからすぐに入園することになって、次の回に遠足でした。それについては津守真の記録があります。

代々木公園遠足

公園前で待ち合わせをした。Y君は、入口のコーラの売店に一目散にすっ飛んで行った。そこから連れ出そうとすると力を抜いて寝そべってしまう。抱えて連れて行こうとすると、暴れてどうしても売店に戻ろうとする。F先生と二人で数メートル行っただけで、こちらの力が尽きてしまう。缶ジュースを一本買うこと

にしてそれをもつて行くが、売店に行きたくて暴れる。しばらく行ってから缶をあけて飲むと、私共の両手につかまって歩いた。母親のところまで行くが、Y君はどんどん歩いて行くので、私がついていった。公園の清掃用の黄色い自動車のそばに行き、それに触った。公園のおじさんが中を見せてあげようかと言ってドアを開けてくれた。ドアを何度も開けたり閉めたりした。後部ドアに気が付き、それも開けたり閉めたり

した。そのうちに自動車に足をかけて内部に入り込もうとした。おじさんたちが来て、自動車は出発したので、歩いてサイクリング道路に出た、それに沿ってどんどん歩いて行った。私はY君の歩くという気持ちが分かったから、Y君が歩く方向に付き合いながらそばに寄って話しかけたり歌ったりした。どこにでも歩いていいよという気持ちと、一緒に親しみ合う気持ちとの両方があった。歩いている間はとても平和な散歩だった。母親のところにもどるマップが頭の中にできているのかどうか疑問に思った。静かな林の中の道路を歩く。斜めになった大木に寄りかかり登ろうとす。木の葉を拾う。じきに捨てる。緑石に腰を下ろす。私も一緒に腰を下ろす。蟻をいじる。道路が通行止めの柵に来るとそこを登ろうとする。サイクリング道路の垣根の間を擦り抜ける。

*

津守 房江（以下Fと略記する）

私と三人のときは、売店のおばさんに嫌がられながら、カウンターのの上によじ登り、止められなくてとても大変でした。でもあなたと二人のときにはとても静かなようですね。大変だと思わないで付いて行ったのは良かったですね。初めて出会った時なのだから。

津守 真（以下Mと略記する）

売店を通るときには大変だったが、その後は面白かった。私にはどこまで行ってもいいよという気持ちと親しみを分かち合う気持ちとの両方がありました。静けさを楽しみながら歩いていきました。

F それはすごいわね。その後も園の外に出て行くというテーマが続いたのでしょ。

M Y君は学校の垣根を乗り越えて向こうに行こうとしたり、煙突や屋上に行く階段を登ろうとしたりしました。

際限のない外出時の大人の気持ち、悩み

M Y君は学校の地下に行くドアを開けて地下室に行くことになるのだが、私はそのとき三人でこの子のクラスを担当をしていて、私には外に行くことにとても葛藤があったのです。三人の中のひとは割に悩まずに地下にも行けた。そのころの地下室はさらに奥から外の道路に出る通路になっていて、Y君はじきにその通路が分かり、その後、外へ出て行くことが多くなってきました。私ともうひとりの保育者にはとても葛藤があって、それが正直な所の問題点だったのです。

F 保育者の性格や育ってきた経験もあるでしょうね。

M どちらが良いかは一概に言えないが……。

Y君のような子どもにはその後何人も出会ってきました。家から学校までたどり着かないのです。途中で止まってしまつて。母親は一日中、子どもと外を歩い

ています。学校にも到達しないで、機嫌のいい時には近くの公園で遊ぶのです。しまいには公園の出口でアイスクリームを食べる子もいて、学校に戻ろうとしません。ある子は地下鉄に乗りたいたことが分かりました。その点は代々木公園にいったY君と似ています。

母親は何度も学校に連れて来ることを試みるのですがうまくいきません。子どもが聞き分けてどこかに行こうと言うとついて来るけれど、ある母親はそれがこわいと言いました。なぜこわいのですかと尋ねると、それをやると子どもと自分との間の糸が切れてしまうのがはつきりと分かるのだと言うのです。

F それはすごいですね、つまり人間同士、ともに歩む同士ではなくて行く手を阻む障壁になつてしまうのね、大人が。

M 母親がそれに気が付いてそれがこわいと言うことも、そうだろうと思う。

F 大人がどこまでも一緒に行ってあげると言う気

持ちにいつもなれるとは言えないでしょ。家には他の家族もいるでしょ。学校には終業の時間があるから、もうそろそろ帰ろうよと言うのは当然のことかと思うけど。それに対してその子が不信感をもつというのはどうしたらいいのでしょうか。

M 当然のことなのだが、分かるようになってからでも子どもが帰る方向になるというのは大人にとって大変な心遣いと労力です。普通の幼稚園では考えられないことかもしれないけど。

F 一人の保育者が子どもを責任を負って一対一で外へ行くのを他の保育者の中にどうやって位置づけるのでしょうか。

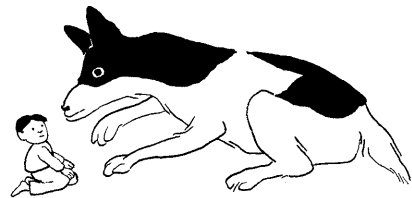
M 私は、その子に付き合っている保育者にどこに行ったかができるだけ聞くようにしています。そうするとその都度、電車のくるホームとか、なに行きの電車とか、その子の興味が分かってきます。そうしているうちに、外を歩くのが好きな子が園内で楽しそうに

トランポリンを飛んでいて、余裕が感じられることもありました。母親にそのことを告げたら、「先生にそういうふうに見えてうれいしい」と言いました。お母さんの努力が報われたと思つたのでしょうか。

最初のY君について言うと、だんだん大きくなってきて、私

は自分の体力がついていけないで、若い保育者に代わってもらいました。Y君が寄り道をして店屋の棚に登るとか、若い職員はそれを苦にしないでやっていて、私は偉いと思つた。私より気にしなかったことは確かです。

F 子どもが外へ外へと冒険するとき、人によって外に向かつてついて行ける人とそうでない人とあるように思います。私は最も外について行かれない人だと思



うのです。今ここで楽しめないで何で外に行くのかかと思ってしまう。だからこそ「多動と言われる子」に私は本当に関心があります。それでいてなかなか関係が付けにくい。子どもにとって大人とは何なのでしょうか。

M 僕にまず言えるのは前進方向を阻止する人間。そういう資質をもった子どもはこの時期には前進しかないのだから、私はただ阻止する人にはなりたくないと思つた。それで親しむ人と、両方をやろうと思つた。

ある先生は苦勞しないでそれをやれるが私はものすごく葛藤がある。他人がどう見るかもね。代々木公園はそれをやらせるだけの環境がある。その代わり運動量が大さい。あれだけ広いからね。公園の周辺を子どもを追いかけて走るんだから。その後Y君とよく外出した先生は偉いと思つた。Y君は、あるときは自転車屋で車輪や道具をいたずらした。その先生は自転車屋さんから怒られたが、子どもと社会との両方を視野に入

れて、両方に失礼にならないように振る舞っていた。

F 代々木公園のことに戻ると、私は大きなシートを広げて、いつでも戻ってらっしゃいとシャボン玉を吹いていました。また、歩いて遠くに行きたくない人もいる訳だから、縄とびやったり、小石をザラザラやったり、ここで遊んでいるからねと、遊んで待っていたのです。だから私は保育者としても全く定着型なのです。遠くまで走って行かねばならないときは、早く戻りたくてしょうがない。保育者の資質と自分の限界を感じさせられることが多かったのです。

園の中での保育力

M 愛育（愛育養護学校）の近くの公園はそういう点ではいい。私はよく行きました。それでもなお、私は学校の中での付き合いを重視しようと考えたんです。自分の保育力をもって付き合うことが大事だと。事実面白く遊んだときは外に行かないですんだ

ときもあつたのではないかと思えます。ずつと後になつてからですが、Y君がシャツをまくり上げておなかを出して、私かなめるといふざけっこをしました。

Dちゃんは朝部屋に入つて来るのだが、すぐカギを開けて外に出たがりました。Dちゃんはまずエレベーターに行きました。何度もエレベーターに乗るので、付いている大人はよその人からどれほど叱られたか。

でもお弁当は部屋の中で食べました。その子は電氣をつけたり消したり、家でもそれを自分でやらないと大変。そんなことをするうちに、D君は部屋の中で遊ぶようになりました。その後、四、五年生になつた頃、また外出するようになり、私は随分外出に付き合いました。どこまで行きたいかは分からないのだが、D君には分かつていて、ある程度外を歩くと戻つて来るのです。卒業するころには、スーパーで何か買って来て学校で食べました。

F そう、目的があつて外出したのね。

M そしてそれを繰り返して、部屋の中では楽しく遊んで。

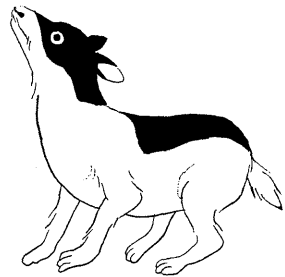
F 電車の名前を書いたり、物を作ることに

興味が向かつたですね。

M Y君も六年生くらいるとき、随分学校の中で遊んで、字や絵でコミュニケーションをつけて、以前とは違つてきたんですよ。

F そうすると外へ外へと向かつた人が、長い時間かけて、やがて落ち着くようになったのね。そのためには特定の人との心のつながりができて来るのが大切なのでしょうか。

M そう。Dちゃんの場合は、中学でも高校でも、皆から愛されています。



F おとなたちが子どもと良いかわりをしてい
と、そうなるのね。

M 僕は外に行くのが好きじゃないから、子どもと外
に行くとはらはらすることがあるけれど、次第に見通
しがついて、この程度で学校に帰って弁当になるとい
うように分かることがしばしばでした。僕は学校の中
でやる保育を主にして考えて来たけれど。

F 子どもによっては、こわいことがとても多くて、
他の子どもには恐怖を感じる子もいましたが、外へ逃
げるのではなく、おとながおんぶしたりして、こわい
ことを学校の中で乗り越えました。

一般論では言えない

F あるとき、普通の幼稚園の先生が見学に来て、保
育に入りました。そのとき、彼女が腰を下げて、手を
広げて走って来る子を迎えたような、挑んだような、
阻止したような、腰を下ろしてパッと手を広げまし

た。その子が、ぎよっとして方向を変えて逃げたんで
す。子どもによっては、迎えられたと思う子もあり、
阻止されたと思う子もあり、随分違うわけですね。

その子の場合、動きが凍ったようになりました。私
はその先生のやり方はこの子には強すぎると言いまし
たが、一般論じゃないのよね。子どもによって受け取
り方が違うのだから。その人にどっちが必要なのか分
からないけれど、人間関係の中で、懐に飛び込もうと
いう子もいるし、それが壁になっっている場合もある。
その人との関係が大切だということを思います。

普通の幼稚園や保育園ではどうでしょうか。

M 外に遊びに行つて家に入るとき、ドアのところ
でバンバン戸を叩いて泣くとかは二、三歳で多くの子に
起こるんですね。帰りたくないとか、おうちに入りた
くないとか。すると「多動」と診断される。ことがしば
しばあります。学校の中で多動という場合には、教室
に入らない、校庭に行きたがる、一部屋に留まらない

で部屋から部屋へと動く。

F だから広いおうちみたいなものと考えればいいのかね。学校という枠、教室という枠を超えることが大変さのもと。

M ただ歩くというだけじゃない。

F 歩くということに伴うこと、歩けるようになったとたんに、こういうことが起こるのね、現代は。

M これも相対的なことで、保育室の中に留まらないで、職員室にも、応接室にも行きたい、それぐらい園の中じゅう行きたい。枠という範囲の考え方。この前話したように、枠の中で動いていれば、園の中で循環しているなら、いいが。それができないというのが現実の幼稚園保育じゃないかな。担任とか、自分の部屋からはみ出して行く子をあまり問題視したら困るでしょう。

F 園の中なら危険が無いのだから、自由だと思おう。教材置き場に行ったり、応接室に行ったり。客が来て

いるときには「こんにちは」と言うことを教えるチャンスと考えられるでしょう。

M それが普通にはそう考えられない。園や学校の枠を超える子の場合には、多動と言われて、これは普通の範疇ではないと言う話になってしまうのです。

F ある青年の母親の話に枠に突き当たったときにだれかに抑制してもらいたいのではないかという議論になりました。本人自身がどこかで自分を押さえてほしいと心の中で叫んでいるという議論でした。

M あんまり早くそれを言うと、きつい保育をすることになるのではないか。それも止めてもらいたいと思っていると言うふうにとらえると問題です。幼児期によく付き合っていると青年期になって分別が出るといのが前回の話の子どもでした。だけどそうならない子もいる。それは社会との相対的な問題でしょう。それだから、幼児期からコントロールせねばならない、子どもに寄り添ってどこまでも行くということが

あつてはならないとなると考え過ぎです。

F もちろん考え過ぎよ。

M そう考えると考え過ぎで、このような資質の子には苦しいことになるでしょうね。だからと言って子どもだけの意志でやって行くことはできない。一緒に外出する人が、その場の状況で、その子の行動と自分の行動と併せて意味をつかんでいることが大事だと思う。自分にはそれ以上できないということまで付き合い合おうとすると自分の力を越えることになる。その幅の大きい人と小さい人がいるのではないだろうか。

F やれないことを壁として受け取るのか、お母さんが好きだから、先生が好きだからあの人やれないというならやらないという情愛との兼ね合いがあると思います。子ども時代の全体を通して、人の心に触れ、人を好きになり、人からも愛されることを経験するのだでしょう。その基礎のうえに皆とやれる人になるのだと思います。

M 第一回で問題にしたのは、外に行くというより、

歩きたいということ、そこを受けとめ、自分自身(自己)を確かにして行くことについて考えました。そして今回は外へ外へと向かう歩き方の子どもについて、私達自身の悩みについても合わせて話しました。